第37号

平成21年

4月30日

題　字

植　木　満

初代東進会会長

東進

発行所

土浦一高東進会

（茨城県立土浦一高
進修同窓会東京支部）

発行人

東進会会長　大野　金一

事務局　〒102-0093　東京都千代田区平河町2－7－5　砂防会館4階

宮崎法律事務所　TEL　03-3221-3711　FAX　03-3221-3713

ホームページ　http://www.geocities.jp/t_toshinkai/

謳粋会筑波山ハイキング（北条大池の桜の下で　記事3頁）　写真提供　若山宏氏(昭 36 高)

平成21年度総会・懇親会は 6月14日(日)正午　学士会館で

平成21年度総会・懇親会は、6月14日(日)正午から学士会館で開催されます。

スケジュールは次のとおりですが、今年は、母校からは吹奏楽部に代わって弦楽部が応援指導部とともに演奏します。

総会後の講演は、ケルト文化の研究者で多摩美術大学教授の鶴岡真弓さん(昭和46年卒)が古ヨーロッパのケルト文化について講演してくださいます。

懇親会のアトラクションは、今年も幹事として手伝ってくれる昭和50年卒の皆さんの企画でラテンダンスのプロで各種競技大会で入賞している松下梨沙さん(25)が福田洋平さんとのペアで美麗な演技を披露してくださいます。

若い期の企画で楽しい行事にしていますので、お誘い合わせのうえ多くの方に参加していただきたいと思います。当日お待ちしています。

詳しくは同封の総会案内状をご覧ください。

総会・懇親会スケジュール

正午　弦楽部・応援指導部演奏・演技

12:30　総会

13:00　講演「ケルト文化と日本」
　　－アイルランドから来たガリバーと小泉八雲－

13:30　懇親会
　　（アトラクション　プロのラテンダンス演技）

15:30　閉会

特別寄稿

茨城の可能性について

小幡 政人
高校１５回卒
(昭和３８年)

茨城を離れて３０年余り、昨秋久しぶりに土浦に帰りました。

私は土浦市荒川沖生まれ。小学・中学・高校・大学(駒場の教養時代は入寮)そして、１９６８年に就職して、１９７６年沖縄に転勤になるまで、土浦に住み自宅から通学、通勤をしていました。沖縄から帰ってからはずっと東京住まいで、その間、仕事柄日本各地を訪れる機会がありました。茨城を外から見ると、住んでいた時には感じなかった茨城のよさ、いたらなさが改めて認識できたように思います。

そこで、私なりに感じている茨城の将来の可能性についてお話させていただきます。

結論から言いますと、茨城の持つポテンシャルは極めて高いのです。しかしながら、茨城の現状はそれを充分活かしきれていない、歯がゆい、もったいない状況にあると思います。

これから、茨城のポテンシャルの高さについて述べたいと思います。

第1に挙げられるのが自然、地理の優位性です。

茨城は、８世紀に成立した「常陸国風土記」に「常世の国」と記されています。耕地は広く肥沃で、山海の恵みがあり、気候は温暖で自然災害が少ない、真面目に働きさえすれば良い暮らしが送れる地とあるのです。まさに、その通りで茨城ほど平地の広がるところは、北海道を除いてありません。また、東の太平洋には寒流の親潮と暖流の黒潮が流れており、動植物の南限と北限が同居するという極めて恵まれた地域であります。また、水の心配もありません。離島である沖縄は深刻ですが、瀬戸内海地域、福岡、長崎なども水は大きな問題です。自然災害による被害額も、茨城は全国でも最小レベルです。そして、地理的には、大消費地たる東京に至近の距離にあるという、大変な優位性をもっているのです。

次に茨城の歴史の実績が挙げられます。

最近になって誇りを持てる茨城の地方史が明らかになりつつありますが、ここで、大きな茨城の歴史的実績について触れたいと思います。日本の歴史は大きな時代的転換を何回か経験していますが、茨城はその際極めて大きな役割を果たしました。貴族政治から武家政治への転換に当たっては、その魁を果たしたのは平将門です。藤原氏が支えた京都朝廷を一時的とはいえ打ち負かしました。その強力な軍事力を支えたのは当時の常陸の経済力・製鉄技術などであった事が明らかになりつつあります。ちなみに、騎馬戦が主力のように思われがちですが、当時は内陸深く水が及んでおり、舟戦が大きなウエートを占めていたようです。その後武家政治を確立したのは源頼朝です。次の時代的転換は、武家社会から近代国民国家への転換、明治維新です。その際の思想的基盤はご存知の水戸学(尊皇攘夷)です。幕末、勝海舟・坂本竜馬・西郷隆盛・大久保利通・吉田松陰・橋本佐内など明治維新の志士は殆ど水戸学の影響を強く受けていました。水戸は思想的に魁の役割を果たしながら内紛により有意の人材を失い、明治維新に人材を派遣することができませんでした。

第3には茨城に集積された科学技術です。

地元では、あまり認識されていませんが、筑波研究学園都市に集積された科学技術と東海村に集積された原子力関係技術は、世界的なもので全世界から注目されています。私自身海外出張中に外国の方から逆に教えられた経験があります。茨城には、このように素晴らしい財産があるのです。

そして第4には広域交通ネットワークも凡そ完成が見えてきました。

生活、産業の振興には交通社会資本の整備が不可欠です。茨城は可住地面積の広さ故に建設時間と資金が掛かる事が課題でした。しかし、関係者のご努力によりネットワークの概成が見えてきました。高速道路は常磐道が南北を貫き、北関東自動車道は２４年には関越と結ばれる予定です。圏央道は24年に東関東自動車道と関越道とが結ばれる見込みであり、東関東自動車道も茨城町から南に向けて工事が進められています。港湾も日立・ひたちなか・大洗・鹿島の4つの重要港湾が整備されました。鉄道は常磐線については、東京乗り入れ工事が開始されており、TXについては、輸送力増強が計画されています。そして、来年3月には茨城空港が開港します。これら交通社会資本整備の総仕上げを急ぐと共に、いよいよこの広域交通ネットワークを上手に利用する時代にはいります。つまり、つくる時代から上手に使う時代へとかわるのです。

今までお話してきましたように、茨城はたいへん高いポテンシャルを持っています。しかし、茨城の認知度の低さは全国でも最低レベルです。でてくるのは、せいぜい水戸黄門と納豆くらいでしょう。現状の茨城は決して羽ばたいているとはいえないと思います。

昨年秋に茨城に帰り、県内各地を訪れて、茨城の広さを実感しています。市町村ごとに個性・特性をもって懸命な地域づくりをしています。例えば、北の大子町は人口減に立ち向かうため全力を「子育て」に傾けています。常陸大宮は、森林の保護に力を入れています。結城は伝統産業・河内は米つくり・坂東は野菜つくり・小美玉は農業と食物加工業・鹿島は教育に力を入れています。茨城は、貴重な自然が残されており、農業復活、自然と共生できる豊かで健康的な生活が実現できるところだと思います。

茨城を元気にする鍵は次の2つだと思います。

先ず、手をつなぐ事です。たとえば、野菜等農産品のブランド化を図るためには、量を集める必要があります。ところが、現状は豊かさ故か共同することを嫌い、独自の行動が多く、ブランド化が困難な状況にあります。ブランド化ができれば、生産性を高める事ができるのです。

次に、地域の個性・特性を大事にして、それを大切に育てていくことです。そのためには、現地現場の感覚を大事にして地域づくりをしていく必要があります。

以上述べましたように、茨城のポテンシャルは極めて高く、地域の個性・特性を大切に皆な協力して取り組めば、素晴らしい郷土づくりができると思います。

謳粋会筑波山ハイキング

謳粋会会長代行　若山　宏

つくばセンター12時集合。薄日が漏れる絶好の日和で、待機していた自家用車に分散し乗車。北条大池の桜を見るため出発。

大池の桜は五分咲きで満開にはほど遠い。人もまばら。暖冬で開花が早いという予想だったが、突然の寒波の襲来で、平年通りになったようである。

今回参加者は26名。内5名は宴会(宿泊)会場の青木屋に直行の予定。21名は全員で大池の周りを桜も見ながら散策。そのあとすぐそばの平沢官衙遺跡に向かう。入り口で案内人から遺跡の講釈を聞く。今から1200年～1300年位前の奈良・平安時代に造営された常陸国筑波郡の役所跡で、復元に3億6千万円をかけたとのこと。

一通り見て筑波山ロープウェーのあるつつじヶ丘に向かう。ロープウェー数分で山頂に着くと、3日前の季節外れの雪の影響で足下が悪くぬかるんでいた。足が滑る。年配者の多い謳粋会、十分注意しなければと思いながら山頂へ。女体山山頂の神社の岩で記念写真。(写真)

さらに男体山へ向かう。途中今が盛りという「かたくりの花」に出会う。小さい薄紫の花が咲いていた。群生地だ。昼過ぎのため花が開いていたのは少なかったが、一服の清涼剤として十分堪能できた。

男体山の頂上を目指さず、茶屋で休息することに。本川さんの中学の同期の方がやっているとか。多くの方が甘酒を頼んだが2名ほどが早くもお酒を注文。つまみに今日摘んだという「せり・三つ葉」のおひたしのサービス。これが美味しい。軽いえぐみがい。金では買えない。これだから旅は楽しい。

自家用車の方と数人はつつじヶ丘にロープウェーで一足先に下山。残りはさらに酒を注文。そこに橋本県知事が筑波山頂に作ったという神社施設の視察に来たとのことで、お店の前を通過していった。帰りに手を振ると、お店に入って来て挨拶を受けた。なかなか気さくな方である。

ケーブルカーで下山して17時から宴会予定の青木屋へ。直行組の5名も到着。

泊まりの方は温泉につかったりして宴会場に行こうとしたら、「橋本知事の会」と重なり準備が遅れているとのこと。皆さん待ち切れずにビールだけで乾杯。

女体山頂上にて

定刻より遅れて宴会を始める。事務局の大野さんから貸切バス中止の経緯と自家用車を提供していただいた地元の皆さんに対するお礼の言葉があったあと、砂川さんの乾杯の音頭でいつもの会が始まった。

会から持ち込んだ4升の酒(すべて茨城産の武勇吟醸・真向勝負・山桜桃・霧筑波。選択は高山さん)のほかに、北条出身の矢口・広瀬さんから霧筑波純米大吟醸など2升の差し入れがあった。今回のお酒はどれも本当に美味しい、文句の付け所がない。普段高価でなかなか手が届かない酒。

時間のたつのは早い。予定の午後8時が迫り会もお披きに。泊まり組はまた部屋へ戻って午後10時過ぎまで話が尽きなかった。

半了のささやき(第7回)

不易流行

高山寺　半了

半了のささやきも賢明で寛容な心をお持ちの「東進」読者のお陰で4年目を迎えられました。題名は昨年の英語から一転、四字熟語に模様替え。

今回は**「不易流行」**。何と読むのでしょうか？「馬鹿にするな、KYな麻生と同じにするな！」先輩諸氏の叱責が飛んできそうです(笑)。一昨年はKYとは「空気を読めない」で、今は「漢字が読めない」。安倍首相から麻生首相へ変わり、意味も又変わる。これぞ**「ふえきりゅうこう」の「流行」の事？**

「不易流行」とは、松尾芭蕉が奥の細道の旅で体得した、芭蕉俳風の基本概念「不易流行其基一也」で、元は「荘子」にあった思想と言われています。その意味するとこは「不易とは『人の心から社会の隆替まで世の中の森羅万象を司る不変の法則、時をこえた真理』。流行とは『時代性や環境条件により時に法則を打破するさまざまな変化』。しかもこの不易と流行の基は一つ、不易が流行を、流行が不易を動かす・・・」(サントリー不易流行研究所)。う～ん、深～い。半了にはちと手に負いかねる。

天皇、皇后両陛下が4月10日ご結婚50周年を迎えられた。日本が戦後の新しい時代を切り開いていた50年前、初めて民間から皇室に嫁がれ、「ミッチーブーム」に日本中がわき、浩宮様を皇室史上初めて病院で出産。3歳で両親と別居するという宮中慣習をやめられ、一般家庭と同ように家族水入らずの生活を続けられ皇室に新しい風を吹き込まれた。同時に皇室の伝統も役割もきちんと守られ、常に国民を思い国民と共に新しい時代を作ってこられた。両陛下は見事に「不易流行」を実践されたのではないのでしょうか。

「流行＝改革」と言えば、今やオバマ米新大統領の**「チェンジ」**。リンカーンによる奴隷解放宣言以来145年、公民権運動から約50年、ついに米国に黒人の大統領が登場。歯切れ良く分かり易い演説、グリーンニューディール政策から破綻企業の超高額報酬へ不快感表明、今の所は順調に滑り出している。**が・・・オバマ大統領の「不易流行」**は如何なるものか、注視が必要なのだろう。中谷巌著(資本主義はなぜ自壊したのか)によると、「三つの修復が当面の課題と見る。第一は『アメリカ経済大不況からの修復』(中略)。第二は、新自由主義政策の中で消滅したアメリカ『中産階級の修復』(中略)。第三は、世界における『モラル・リーダーシップの修復』(中略)。ひとつは、アメリカ型金融資本主義への反省に基づく『新しいグローバル資本主義モデル』の提案である」。

一方、日本の「流行＝改革」と言えば小泉元首相の郵政民営化。その後3人もの世襲首相に変わり構造改革も「悪玉」にされ見事に骨抜き。政界は相変わらず低レベルの批難と保身合戦。経営者や米国式価値観をひたすら推奨してきた経済学者も評論家も、アメリカ発の未曾有の経済危機にも「百年に一度」とまるで自然災害、「誰の責任でもない」と言わんばかり。明治時代の「和魂洋才」と国を守る先人の気概は何処へ行ってしまったのか？

そこで今回のささやき。**「ひとりの人間も「不易」と「流行」の狭間で生きて成長。軽薄な流行に惑わされず自分の価値観、軸をしっかり持とう」。**

最後に。残念な事ですが、最近東進会を創設し発展させ支えてこられた大先輩方が亡くなられたり、健康を損なわれたりしています。「東進会の不易流行」、つまり東進会の何を守り何を変えていくのか、真剣に考え実行する時期になっています。

まずは「継続は力なり」即ち繋ぐ事が第一。今こそ、アラ還からアラフォー世代の出番ですよ。宜しく。

東大は激減
今年度大学進学状況

毎年3月になると週刊誌を賑わせる大学合格者高校ランキングで、土浦一高は公立高校では東大合格者がトップ争いをしていたので有名になった。

平成15年までは毎年30名台(但し平成9年は最高の43名で翌年はその影響か27名)、その後は20名台で推移してきたが、今年は16名(現役10名)で、毎年上位を争っていた岡崎高、浦和高に大きく離される結果となった。

私立を含めた上位3校(開成・灘・麻布)が大きく減らし、地方高校が増やして平均化しているのと同じ現象か不明であるが、土浦一高の場合、学区を全県に広げ優秀な生徒を入学させた筈の初めての卒業生であるだけに、期待を裏切られた感もするであろう。

しかし、週刊誌が騒ぐほど東大だけが目的ではない、早稲田大が東京理科大と同じ100名台に増やし、一橋大も10名を超えるまで増やしたのは、目的意識を持って大学を選んでいるのだろう。

また、難しい文科系よりも入りやすい理工系を選ぶ傾向を見ると、安全第一で志望校を選んでいるのかも知れない。

国公立大学

入試年度	平成１７年		平成１８年		平成１９年		平成２０年		平成２１年	
大学	計	内新	計	内新	計	内新	計	内新	計	内新
北海道大	1	1	8	4	4	1	4	3	3	1
東北大	29	21	22	16	19	14	21	15	27	20
茨城大	11	8	9	9	11	10	9	7	7	7
筑波大	46	38	39	29	51	38	49	37	38	30
千葉大	10	5	17	9	11	6	7	7	12	8
お茶女子大	5	2	6	4	6	5	5	5	8	6
東京大	26	15	21	15	28	19	26	15	16	10
大東京外語	4	3	4	4	3	3	3	2	1	1
東工大	7	6	5	3	8	4	9	4	13	5
一橋大	11	7	4	2	6	3	3	1	11	3
横浜国立	9	6			4	1	4	3	4	3
京都大	7	6	4	1	3		7	7	5	3
大阪大	2	1	7	4	1	1	2	1		
名古屋大	1		1	1	2	1	1	1	1	1
九州大					2				1	1
その他	31	17	30	14	31	18	29	18	23	9
国立大計	199	135	177	115	186	123	179	126	170	108
公立大計	14	11	12	6	7	4	11	7	6	3
国公立大計	213	146	189	121	193	127	190	133	176	111
内医学科	16	11	21	10	13	8	12	7	16	4
大学校計	1				3	2	4	2	3	1

私立大学

入試年度	平成１７年		平成１８年		平成１９年		平成２０年		平成２１年	
大学	計	内新	計	内新	計	内新	計	内新	計	内新
青山学院大	16	10	12	10	21	18	20	14	8	7
学習院大	17	10	8	7	8	6	12	6	9	4
慶応大	61	31	53	26	68	40	52	22	58	27
国際基督大	3	2	4	1	7	6	3	3	7	5
上智大	15	5	17	12	30	18	17	11	21	14
中央大	65	31	39	23	32	13	27	13	57	18
津田塾大	9	4	4	4	15	13	9	5	8	8
東京女子大	14	9	7	6	15	10	11	6	2	2
東京理科大	93	45	106	48	110	39	111	62	107	45
日本女子大	13	8	5	4	11	9	18	13	17	10
法政大	23	6	21	13	18	9	18	10	26	14
明治大	71	33	74	40	68	44	65	27	89	41
立教大	31	17	38	23	37	24	42	23	58	32
早稲田大	96	60	87	46	121	72	87	45	109	59
その他	180	92	196	72	123	72	135	73	137	61
私立大計	707	363	671	335	684	393	627	333	713	347
総計	921	509	860	456	880	522	821	468	892	459

編集後記

前の編集長酒井隆二君が昨年8月に亡くなってから、前号は酒井君が作っておいてくれたページレイアウトにテキストを流し込んで容易に完成できたが、従来のページレイアウトを一から作るとなると、ページ罫線を掛けたり、欄外の発行日と頁の表示にヘッダーをつけたり、4段の段組みの境界線の位置を調整したり、普段経験のない作業をしなければならなかった。

次期編集長は初田正雄君(昭41高)に決まっているが、まだ慣れないというので、編集会議を兼ねる慣習になっている毎月の謳粋会幹事会の席で相談しながら原稿依頼をした。

小幡政人君には現在の茨城県の情勢について熱く語ってもらった。

謳粋会の4月は、毎年土浦で開催する慣例であるが、宴会だけで土浦に行くのも意味がないし、桜の季節でもあるので、5、6月の近郊旅行を兼ねて、北条大池の桜を愛でながら筑波山ハイキングということになったが、謳粋会だけではなく東進会の行事にしてもよいのではなかろうか。

今年度の総会で講演をお願いしている鶴岡真弓さんにはケルト文化について書いてもらおうとしたが今号は4頁だけなので次号で講演の報告として掲載したい。「半了のささやき」も快調である。(大野)